

知ってますか
技術の

あれ
これ

15

I.K.ブルネルの魅力(2)

懸賞設計 クリフトンの吊橋

三浦 基弘

MIURA Motohiro

元大東文化大学講師
土木学会100周年記念誌編集委員



トンネルの事故で父との仕事から離れる

シールド工法の育ての親マーク・イズムバード・ブルネル(写真-1)は、息子イズムバード・キングダム・ブルネル(写真-2)と一緒にテムズ川の底を掘りぬくトンネル工事に従事していた。蒸気機関車の発明者リチャード・トレビシック(Richard Trevithick 1771-1833)が中断したままになっていたテムズ川底トンネル工事を再開するためにマーク・ブルネルが会社を設立したのが1823年。1825年からマークの特許であるシールドを用いて工事に取り組んでいた。しかし相次ぐ出水事故に見舞われ、1828年1月12日、トンネル内の出水事故でI.K.ブルネル(以下、ブルネル)は、ひざに傷を負うが運よく助かる。しかし、6人の作業人が犠牲になった。ここでブルネル親子は失意のうちに工事から離れる。この工事が再開されるのは7

年後の1835年1月。指揮をとったのは、かつてブルネル親子を助けたアイルランド出身のリチャード・ビーミッシュ(Richard Beamish 1798-1873)技師。その後も出水に見舞われるが、1842年3月にトンネルが完成する。工事を始めて17年後のことで難工事であった。

静養地クリフトンで、吊橋のコンペに応募

ブルネルは、ひざの怪我、心労を自宅で治療・療養後、ロンドン南、イギリス海峡を望むブライトンの保養地で静養をした。そして1829年初め、両親の勧めもあり、ブリストル(図-1)の北西部に位置するクリフトン(Clifton)の高台の保養地に出かけた。

このクリフトンの高台とリー・ウッズ(Leigh Woods)の間が渓谷になっており、エイヴォン川(the Avon)がここを流れている。因みにウィリアム・シェ

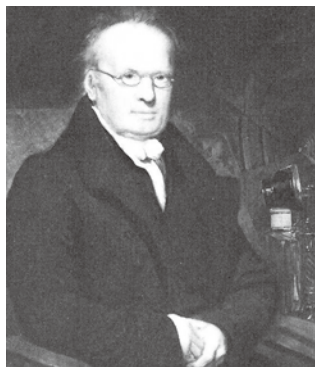


写真-1
Marc Isambard Brunel
(1769-1849)

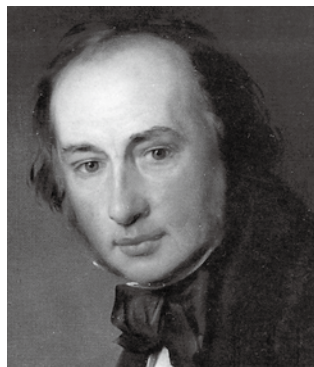


写真-2
Isambard Kingdom Brunel
(1806-1859)

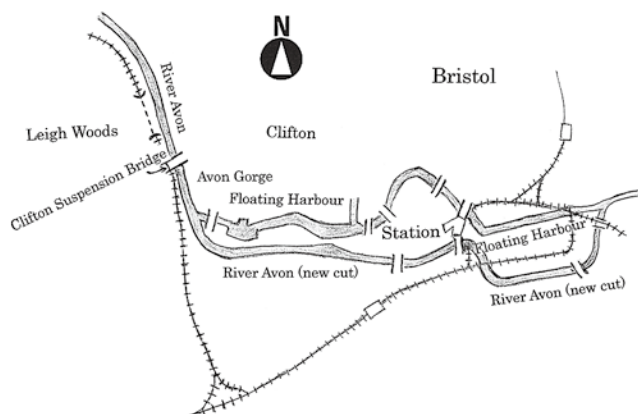


図-1 ブリストル近郊図